説苑

マルサス傳研究

南亮三郎

（はしがき）私は豫てから自分の筆で一度マルサス傳を書いてみたいと考へてゐたが、つひ機會がなくて今日に至つたのである。こゝに發表するものは近く完成すべき一著『マルサス』の卷頭に置かうとする原稿の一部である。敢へて研究と名付くべき性質の堅苦しいものではないが、資料その他の關係から恐らく私がこの國の中にあつて書きうる最上のものであらう。實際私は文末に一括して掲げた資料の中比較的古いものは殆んどすべて東京商大、慶應大學及び東北帝大の各圖書館を驅けめぐつて漸く披讀するを得たのである。およそ學者の生ひ立ちなり、性格や生涯の事歴なりが、その人の學説や思想を理解するのに大切であることは誰れもが承知してゐるが、わが人口學者マルサスについてはこれは特別にさうなのである。「アダム・スミスや他の論者はその誤謬を知識上の不確實に負うてゐるが、マルサスはその多くを彼れの優しい心に負うてゐる」とはジェームス・ボナーの言であつた。マルサスを全的に理解するためには、その「優しい心の」由來をも探らねばならぬわけである。かくて私のマルサス傳は十五、六世紀の昔に遡つてのマルサス家の起源から始まるのであるが、こゝでは紙數の關係があつてその全部を發表することが出來ない。從つてこゝでは父ダニエル以前のマルサス家の部分と、終りの方では彼れの交友關係、死、及び子孫を取扱つた部分と、さらに若干の回想を認めた部分との三節を割愛することにした。尙ほ本稿は一つの纏まつた著作の一部分となるべきものであるから續く諸章への關聯を豫想した記述も所々にあるが、それらはすべて『マルサス』が刊行されてからゆつくり讀んで頂きたいと思つてゐる。とりあへずこれを私のマルサス傳の一齣として讀者に提供する次第である。

一　父ダニエル

多くのマルサス傳記者（ペイン、ボナー、スチブン、ドライスデール、ケインズ等々）の異口同音に傳へるところでは、マルサスの父ダニエルは少しく風變りな人物であつた。彼は一七四七年（十七歳）の復活祭にオックスフォードのクィーンス・カレッヂに入學してそこで大學教育を受けたが、學位をとつては卒業しなかつた。彼は大の旅行好きで、イギリス本國の各地だけではなく歐洲大陸をも遊歴した。そして結局―父祖の遺産に基いて―イギリスの一鄕紳（country gentleman）としての生活をはじめ、平靜な知的趣味と交友とを樂しみながら匿名で若干の作品を書いたりして僅かに野心を慰めてゐた。彼は何よりも閑靜な生活を愛した。彼は規則的に運動もし、獵にも出かけた。彼れの知的趣味は特別に植物學に向けられ、植物標本をも作つた。彼はギリシャ語、ラテン語、そして多分ドイツ語をも學んでゐた。ゲーテの『若きウェルテルの悲しみ』（一七七四年）の英譯は彼れの手に成つたものと傳へられた程である。それは事實疑はしいとしても、彼は多分ジェラーディンの『風景論』（一七八三年）の飜譯者であつた。わがマルサスは後年（一八〇〇年二月）マンスリ・マガジン誌上において亡父ダニエルの立場を辯護して、「父は單なる飜譯者たるべく餘りに獨創的であつた」旨を述べた（ボナー）。しかし少くとも『風景論』の飜譯だけは疑ひがない如くであつて、ケインズは「マルサス自身の文庫中で、該書の一部に書き込まれた註記から斯く見る」（『評傳集』）と記してゐる。

父ダニエルの幸福なる結婚は一七五二年（二十三歳）の五月六日に擧げられた。ペインの『マルサス家歴集誌』の記述によると新婦は新郎よりも三つ年下で、ジョージ一世及び二世に仕へた宮廷藥劑師トーマス・グレアムを祖父としチェルシー病院のダニエル・グレアムを父とするヘンリエッタ・カザリン（Henrietta Catherin）孃であつた。彼等の新家庭にはやがて二年後長男シドナム（Sydenham 1754—1821）が生れる。しかし次男のロバート、わがマルサスを産む前には、兩親はこの人物に最もふさはしい新邸宅を構へて置かねばならなかつた。すなはち一七五九年、父ダニエルはサリー州ドーキングの附近に、チャートゲート農場（Chert-gate Farm）といふ名で知られてゐた小さな、立派な邸宅を購入した。そしてこれに「ルッカリ莊」"The Rookery" といふ名を與へた。そこには樹木の生ひ茂つた森もあり、清水の流れる小川もあつて、あらゆる自然の清楚な美しさが具はつてゐた。しかしわが待たれたる人物は容易に生れて來なかつた。小鳥は幾度びかその森に塒をかまへまた幾度びかその雛鳥は發つて行つた。かくてつひに—こゝに居を構へてから七年目—一七六六年の二月十三日*に待たれたる次男ロバートは生れたのである。時に父三十六歳、母三十三歳であつた。（「ルッカリ莊」は只わがロバートを生むための場所であつた如く、その任務が終つて二年の後父ダニエルはこれを賣却して同州内のオールベリ（Albury）に居を轉じた。）

*この生日には注意して欲しい。多くのマルサス傳には混亂がある。この混亂は大體三つの系統に分類することが出來る。第一は「二月十四日」とするものでボナーの『マルサスと彼れの業績』を始めとし、マイヤー『會話辭典』（一九〇八年版第十

二巻)、『ブロックハウス』縮刷版、セイ・シエイレエ共編『經濟學新辭典』(一九〇〇年版)等がそれである。第二は「二月十七日」とするもので、スチブン、リー共編『國民傳記辭典』(一九二二年版第十二巻)、ハアムズワース『萬有百科辭典』(第八巻)、パトリツク、グルウム共編『チエンバー傳記辭典』、エルスター編『國民經濟辭典』(第四版第二巻)等々である。さらに第三は「二月二十七日」とするもので例へばドルン譯『人口原理論』(第二版)へのヴエンチヒの添文はさうなつてゐる。全く驚いたことである。私は在來、この中の第一、即ち「二月十四日」が正しいものと思つてゐた。何故ならこれにはマルサスの墓碑銘に記された生日といふ證據があるから。他の二つの日附には根據がない。しかるに近年に至つてこの墓碑銘に記された生日が疑はしいといふ事實が傳へ出されたのである。即ち、マルサス生誕當時のウオツトン(Wotton)教區の登錄簿によつて新たに「二月十三日」と確かめたのはケインズの功績である。その『評傳集』九九頁を見よ。私はこれに從ふことにしてゐる。

しかしながら吾々はまだ生誕の地「ルッカリ莊」に止まつてゐなければならぬ。赤ん坊が生れて三週間目の一七六六年三月九日に、早くも大きな出來事が生じた。この日二人のしとやかな、しかし偉大なる教母が—ジャン・ジャク・ルソー(Jean Jacques Rousseau 1712—1778)とデヴィッド・ヒューム(David Hume 1711—1776)とが—一緒に「ルッカリ莊」を訪づれたのである。ケインズの筆致に倣ふならば、彼等はおそらく、この赤ん坊に愛撫のキスを與へて樣々な知的贈り物を讓り渡したことであらう。父ダニエルはヒュームの友人であつたばかりでなく、またルソーの、熱烈なるとは言はないが、心からの崇拜者であつた。ルソーがはじめて渡英して來たとき、ヒュームはサリーで、ダニエル・マルサスの身近かで住むことを奬めた。ダニエルはその面倒を見ると言つてゐたのである。ルソーは三月八日にそこを檢分したが、後で斷はつた。二週間の後ルソーはダービ

シアのウットン（Wootton—これは前出の Wotton とは異なる）で慘めなる寄寓をはじめた。彼はそこで『懺悔錄』の稿を起したが、寒い、退窟な、そして淋しい場所であつた。やがて數週間の中に、その時すでに半ば狂亂してゐたルソーはヒュームとの喧嘩をはじめたのである。これは無論ルソーが惡かつた。最初からダニエルの招待通りにしてゐたら二人の偉大なる「敎母」の喧嘩は起らずに濟んだであらう。一方、ダニエルとの間は良かつた。一七六四年の春モーチエに初めて訪問して以來、ダニエルはルソーを崇拜し、ルソーはまた懇切で友情的であつた。

一七六八年頃（マルサス二歳）父ダニエルは、ルソーのために植物學の文献を蒐集するのに苦勞してゐた。ルソーは一七七一年附の『植物學要義についての一婦人への手紙』を出して二年の後、その文庫をダニエルに若干の植物標本を贈物に添へて買取つて貰つた。この文庫をダニエルはその遺言で—ペインによるとこの遺言は一七七九年一月四日附ですなはち彼れの死の二十一年前に書かれてゐた—自分の母の姪に當るジェーン・ダルトン夫人（Mrs. Jane Dalton）に與へた。一七七九年といへばルソーの死の翌年であるが、そのとき、わがロバートはもう十三歳に成長してゐた。父は何故にこのルソーの署名入りの文庫をわがロバートに與へなかつたのであらうか。ロバートは、しかし危いところで、父讓りの植物學に囚はれないで濟むことになつた。ケインズによると、問題の書籍の中二冊が今尙、オールベリのダルトン・ヒルにあるマルサス家文庫（ロバート・マルサス氏現有）に殘つてゐるとのことである。このやうに友情の厚かつた父ダニエルがルソーの遺言執行人

であつたと傳へられたのは不思議ではない。オッターが『マルサス追憶記』（一八三六年）において初めてそれを書いてから、ボナー（一八八一年）がこれに從ひ、ドライスデール（一八九二年）が又これを反復した。しかしケインズはこれは有りさうでないことだと記してゐる。私はその孰れが眞であるかは知らない。たゞダニエルが最後に、そして第三回目にルソーに會つたのは一七六六年六月、ルソーがあの「寒い、退窟な、淋しい」ウットンに滯在してゐた間に訪問した時であつたこと、並びにルソーに對する彼れの友情は最後まで續いてゐたといふ事實だけはほゞ確かであつたやうに思はれる。

隣人達はダニエルを親切な、聰明な人、彼等の教區の飾りであると思つてゐた。しかし彼等は又、ダニエルは一二人の偉大な「教母」は別であつたが—あまり友人は作らないで、獨りでゐること、及び子供達とゐることを最も好んだ風變りな人だと考へてゐた。これは事實であつたに違ひない。彼れの息子、わがロバートも亦父に似て、「社交的ではあつたが、時折りの孤獨を非常に樂しんだ」（ボナー）のであつた。この風變りな父については尙ほ後に多くを語らねばならないが、こゝではこれに止めて、誰れもが殆んど詳しく傳へてゐないわがロバートの母について一言ふれて置くことにしよう。

母ヘンリエッタ・カザリンについてボナーは、傳へらるゝ資料の極めて少いことを喞ちつゝ僅かに次の如き記述を挿んでゐる。「彼女は家事の神殿 oracle であつたやうに思はれる。無論ロバートは母に、親しさと、愛着と、尊敬とを拂つてゐた。ロバート宛の父の手紙（一七八四年四月二十一日附）からは、母はロバートが二

大學のいづれへも行かないことを欲したやうに見える」と。この母が由緒正しき一名門の出であることは前に記したが、風變りな夫ダニエルとの間に八人もの子供を持つた事情から判斷して、たとへ家計の苦勞からは解放されてゐたとしても、ひと一倍忙がしく家事と育兒に立ち働いたことであらう。「家事の神殿」はよい形容語であつた。しかしそれにしても、わがロバートの大學入學に贊意を表しなかつたといふのは彼女の單なる氣質によるのか、それとも又、それほど教育に不熱心だつたのであらうか。これを解くべき資料はない。しかし私は、他の多くの點では可なり杜撰と思はれるドライスデールの『マルサス傳』（一八九二年）が早くも母に關する情報の缺如に氣づいてマルサス血緣の資料を手掛りに次の如き描寫を、試みてをるのを見て、非常に愉快であつた。母は、やはりわがマルサスにふさはしく、單なる「家事の神殿」ではなかつたのである。その描寫はかうである。—

「父ダニエル・マルサスは、優雅ではあつたが、我儘な人であつた。彼れの妻は彼れに忠實であつた、そして才能のある婦人〔傍點原文〕ではなかつたが、學才はあつたので、わが家の娘を家庭教師なしに教育した。子供達は悉く彼女に忠實であつた、別して長男〔兄シドナム〕はさうであつた。トーマス・ロバート〔わがマルサス〕は、多分、父親に一層愛着してゐた。しかし母親の有した溫順さは承けついだ。何故といふに彼は、おそらく何れの著作家が嘗て受けた以上の攻擊を受けながら、未だ嘗て、誰れについても粗い言葉で語つたことは知られてゐないからである。……彼れの母の娘時代の名はグレアムといつて、*スコットランド人系の

一舊家の出であつた。こゝに彼女の性格をゑがく一章句がある―〝要するに、私は彼女が穩かで、謙遜で、親切で、ロマンチックで、そして完全に無私の人であつたと想像してゐる。しかし彼女は息子達の愛情は牽いてゐたけれども、彼等の性格を造りあげる種類の人物であつたとは思へない。〟」

＊こゝにすでにドライスデールの杜撰の一例がある。「グレアム」は母の「娘時代の名」ではなくて、その實家の姓であつた。因みに記して置くが、―ペインによると―母ヘンリエッタ・カザリンは父ダニエルと同年に歿し、サリー州のウオットン(Wotton)の墓地に倶に葬られてゐる。二基の質素な墓石にはかう錄してある。「ダニエル・マルサス、一八〇〇年一月五日歿、行年七十歳。」それからもう一つには「ヘンリエッタ・カザリン・マルサス、一八〇〇年四月五日歿、行年六十七歳。」

二　少年時代

さてわがロバートはすでに生れてゐる―「樣々な知的贈り物」はヒュームとルソーの祝福から、欝勃たる學術的な「野心」と「社交的ではあつたが時折りの孤獨を好む」習癖とはその父から、そして又、「穩かで、謙遜で、完全に無私」な品性はその母から享けながら。

彼は少年となつた。「風變りな」父はしかしこの少年を、兄シドナムと共に公立學校へは上げなかつた。父はすでにこの少年の「才能を感じてゐた」(スチブン)、或は反對に言つて、この少年はすでに「父の愛と野心とを覺醒した天性をあらはしてゐた」(ケインズ)。父はこの天性の毀されるのを惧れる如く、わが手で教育を獨特な方法で始めた。この方法をダニエルは、「教母」ルソーの著作から獲たやうに思はれる。ルソーの『エミ

ール』（一七六二年）には次のやうに書いてある。―「造物主の手を出るときは凡ての物が善であるが、人間の手に移されると凡ての物が惡くなつてしまふ。人間は或る土地に他の土地の産物を生じさせようと强ひたり、或る樹に他の樹の實を結ばせようと强ひたりする。氣候も、風土も、季節もごちやごちやにしてしまふ。人間はその飼犬や、馬や、奴隷を不具者にしてしまふ。人間は一切のものを顚倒し、一切のものを不具にして置いて、その畸形を喜んでゐるのである。お化けを愛してゐるのである。」

わがロバートは「不具者」にしてはならない！　かくて父は一應の私教育を了へてから二人の兄弟を、クラヴァートン（Claverton）―讀者はこの地名を特に覺えてゐなければならない―の教區長たりしリチャード・グレーヴス（Richard Graves 1715―1804）の私塾に送つた。年代はスチブンによると一七七六年（兄二十二歳・弟十歳）、ボナーによると一七七九年（兄二十五歳・弟十三歳）であつた。多分後の方が正當であらう。リチャード・グレーヴスは父ダニエルの舊友で、可なり學識もあり、ユーモアにも富んでゐた。諷刺小說『精神的ドンキホーテ』（一七七二年）は彼れの著作であつた。マルサス兄弟はこゝで躾けとラテン語の學習とを勵んだ。塾生は他に數人あつたが、―兄のことは別として―大抵はロバートよりも年長であつた。塾頭グレーヴスはロバートについて次の如き情報を父に書き送つてゐる。―「ロバート君は、極めて穩かな性質をもつてゐて、正當な權利でさへ他人と爭ふよりは寧ろ拋棄せんとするやうに見えますが、いかにもパラドックスなやうに、鬪爭のための鬪爭を好み、毆り合ひを喜びますが、彼とその相手とは間もなく最も親密な友達となるのです。」（一

七八〇年八月十日附）

わがロバートはこのとき十四歳である。彼はこゝで尙ほ二箇年の薫陶を受け、一七八二年に他に轉ずるのであるが、彼は最後までこの幼少時の舊師にふかい情誼を示した。スチブンによれば、一八〇四年（マルサスが東印度學校の教授に就任した前年）舊師の訃をきくや馳せて「一僧侶として舊師の死の枕邊に仕へた」といふことである。―記述は元へ戻つて、一七八二年（十六歳）わがロバートはいま一人の私教師の許に轉ずる。異教の僧侶で、一七七九年以降ウォリントン（Warrington）で異教徒學校を經營してゐたギルバート・ウェークフィールド（Gilbert Wakefield）といふ人物がそれであつた。彼れの教育方針はやはり『エミール』式の自由教育で、從つて父ダニエルの方針とも一致してゐた筈である。集まつた子弟達の三分の一は、ダニエル・マルサスの場合における如く、意見においては自由なる、しかし國教會々員の弟子達であつた。この學校は一七八三年早くも解散を命ぜられ、ロバートは僅かに數箇月を送つただけである。しかしロバートは、師についたまゝウォリントンからノッチンガム近くのブラムコート（Bramcote）へ移轉した。他の學友達は直ちには一緒にそこへ行かなかつた。彼は後にケムブリッヂ大學に行くまで一緒にゐたギルバートの唯一の弟子であつた。

何が彼をこのやうにまでギルバートに結びつけたのであらうか。ケインズによれば、ギルバートは「多くは粗暴で、躁急で、矛盾に滿ちた見解を持つた、敏活な、大膽な論爭家」であつた。そのためであらうか彼は、後年（一七九九年）、フランス革命に關して筆禍を起しドーチェスター監獄に投獄されるのである。この間の事

情については『イギリス急進論者』（一八九九年）の著者ケントが次の如き深刻な記述を行つてゐる。―「この不幸なる人物は、深い學者ではなかつたとしても、高尚な、教養ある人物であつた。しかし又、彼は適切な心の平衡を缺いた人物であつた。彼れの熱心さと彼れの情操の寛大さは、多くの人々の同情を喚び起した、これ等の人達が彼に全く賛成し得なかつた場合でさへ。例へばフォックス（Fox）は彼を叙して『自由と博愛の精神を完全に體得せる』人と言つた。しかし政府を叙述する點ではギルバート・ウェークフィールド以上に憤激的論調で述べた急進論者は他に存しなかつた。彼は言つた、『××は測り知るべからざる恐ろしさで人類を蹂躙した、その程度たるや古代及び近世の最も慘酷なる暴君達の所業をも凌いでゐる。同胞の死は××にとつては、道もなき沙漠における朽葉の落つること以上のものではない。陸も海も××××××××で蔽はれてゐる』と。これは愚の骨頂である。この筆者は監獄行きよりも寧ろ精神病院行きに適してゐたのであるが、彼は慘めにもその煽動的誹謗のために二箇年の禁錮に處せられたのである。」

それは危いことであつた。また卑肉なことであつた。―わがロバートは成長した後正にこれ等の「急進論有」の所論を根柢から覆へさうとするのであるから。しかしながら、少年ロバートには、それはまだ判らう筈はなかつた。ロバートはこの師に「非常に愛着し」（ケインズ）、又この人を「稱讃してゐた」（ボナー）。彼も亦ロバートを愛した如く、專らこの少年のために氣をつけた。ブラムコートの移轉先からロバートは父に宛てゝ次のやうな手紙を送つた。―「大學へ行く前にブラムコートで過ごしたこの短い期間を私は決して悔悟してはな

らないと思ひます。と申しますのは、もし私に誤りがないなら、私は一層着實な、規則的な研究方法を體得したからです。」（一七八四年四月十五日附）―附言することが許されるなら、ロバートはこゝで「敏活な大膽な論爭者」たる師の一面をも習得することが出來たと附け加へてもよかつたであらう。ウェークフィールドはしかしロバートに、さらに良い利益を與へて呉れた。即ち彼は嘗て（一七七六年）ケムブリッヂのジーサス・カレッヂの「特待校友」Fellow たりし關係から、わがロバートのために自費生としての入學許可を得て呉れたのである（一七八四年六月八日）。かくてロバートは「恐らく」（ケインズ）この年の十月、冬學期からケムブリッヂの大學生活を始めることになつた。時にマルサス―吾々はもうロバートと呼んではなるまい―十八歳であつた。

三　青年時代

ケムブリッヂで、わがマルサスは、又もや「最年少者であつたらしい」（ボナー）。入學當初（少くとも十一月頃までは）若干科目の試驗があつた如く、彼はそのため特別に數學を勉強してゐた。數學へのこの特別の傾到は在學全期間を通じて變らなかつた。それは學位をとるに最肝要なためでもあつた。學位を―父ダニエルのとらなかつたその學位を、しかも父の母校とは異なつたケムブリッヂで、とらねばならなかつた。母は「二大學のいづれへも行かないことを欲してゐる」旨を述べた前掲の手紙（一七八四年四月二十一日附）で、父はギル

バートの許にゐる息子に宛てゝかう書き加へてゐるのである。―「私はおまへが學位をとるのを無上の樂しみにしてゐる、そして私はむしろケムブリッヂを推す」と。しかし青年マルサスは、父の「野心」を滿たすだけでは滿足出來なかつた。彼は「しばしば英文學及び佛文學へ逃避をした」(ボナー)ばかりでなく、「歴史、詩、及び近代語學を學んだ」(スチブン)。そして「ラテン語とギリシャ語」(スチブン)の、「ラテン語と英語」(ケインズ)の、或は「ラテン語、ギリシャ語及び英語」(ボナー)の朗讀演說で賞を獲た。一七八六年(二十歳)にはブルンセル奬學金の授與者(Brunsell Exhibitioner)に選ばれた。それまでの彼れの學費は年額百磅に上つてゐた(ケインズ)。かくて彼は一七八八年(二十二歳)數學の第九優等生(Ninth Wrangler)として全課程を卒へたのである。

ケムブリッヂの大學生活は、しかしさらに、マルサスにとつては愉快であつた。彼はそこでクリッケットやスケートを樂しみ(ケインズ)、また操艇をも好んだ。後年リカアドはマルサス宛の一書簡でかう書いてゐる。―「さう、ヘンリーからメイドンヘッドへお引越しなさつたのですか。定めしテームズの眺めを見失ふまいとの御決心だつたのでせう。私は年次競艇大會の候補者としてあなたのお名前が出るのを期待してゐますよ。」と(一八一九年九月二十一日附・リカアド書簡集第六九)。その溫雅な氣質と動作とは後年においては「極端」(ケインズ)であつたやうであるが、大學ではマルサスは快活な學生であつた。彼はそこで師友達と得難い知的交友を重ねた。この頃ケムブリッヂのジーサス・カレッヂは長い睡眠狀態から醒めて、知的醱酵の中心たら

んとしつゝあつた。その導火線の一つはマルサスの師ウィリアム・フレンド（William Frend）で彼は後述のペーリーの門下であつたが諸著を通じて國教會からの脱退を主張し、功利主義の信捧と思想の自由や平和主義を論じて波紋を卷き起した。ために彼は「特待校友」の地位を奪はれ（一七八九年）、やがて又大學から放逐せられた（一七九三年）。ボナーによれば、マルサスの友人オッターは一七九〇年以來「特待校友」であつたのでこの嚴しい求刑に反對投票したが、マルサスはやつとこの年（一七九三年六月十日）「特待校友」になつた許りなのでその名は記載されてゐない由である。しかしスチブンによると、この翌年には又詩人コールリッヂ（S. T. Coleridge）の除名問題が起り、今度はマルサスは決議に參加した「特待校友」の一人であつた。

ケムブリッヂの知的影響としてさらに看過し得ないのはウィリアム・ペーリー（William Paley 1743—1805）のそれであつた。彼れ自身は一七七五年にケムブリッヂを引退してゐたが、その著作『道德及び政治哲學の原理』（全二卷）はマルサス一年のとき、一七八五年に出版された。* 本書は廣汎なる規模においてキリスト教神學の立場から人間行爲の格律を論じたもので、ながくケムブリッヂの試驗用書として採用されてゐた。マルサスも亦これを熟讀したに違ひない。それは彼れに、まづ精神科學一般の點で、ふかい影響を與へた（マルサスの同時代人たるベンタムへの影響も亦ケインズは指摘してゐる）。しかし私はこの影響を、もつと現實的な科學側面で發見し得たと思つてゐる。といふのは、「人口論」が、この書の中に詳しく說かれてゐるのである。そこには人間の增殖傾向が二十年倍加の速力でもつて表現せられ、また明確に食糧との關係において人口の規制

作用が説かれてゐる。マルサスがその思想の根本を、或はその思索の基礎を、後年アダム・スミスから、ステュアートから、或はタウンセンド等々から「汲み取つた」と考へること、乃至は人口問題それ自體の重要さをゴッドウィンの著作から、或はこれをめぐつての父との談論から初めて氣づいたと考へることほど誤つたことはない。素養はより早くから、彼れの學生時代から發してゐる。たゞマルサスがペーリーのこの「人口論」に全面的に影響されなかつたことは何よりも幸ひであつた。後年マルサスは不刊行の論稿『危機』(一七九六年)において人口問題にふれ、ペーリーの人口思想への疑點を述べてゐるが、ペーリーはかくも重要なる思想の數々を前述の著作中に展開しながら、結局は單純なる一箇の人口主義者として自からを表現してゐたのである。即ちペーリーは言つてゐる。「社會の全體としての幸福はその員數とほゞ正確に比例する。換言すれば、住民の數が二倍となれば幸福の量を二倍作り出すであらう」と。

＊ケインズはこの書が一七八五年「ケムブリッヂで出版された」と記してゐる(『評傳集』一〇八頁)。私の利用したメンガー文庫中の初版本は出版年は確かに右と同じであるが、出版地は「ダブリン」と錄してあつた。

ペーリーの影響と並びてこゝに殊記しなければならないのは史家ギボンの影響である。マルサスは大學生活の終り頃、歴史や地理學にも讀書の範圍を擴げてゐた。「數學優等生」となつて後の父宛ての彼れの手紙(一七八八年四月十七日附)はかう述べてゐる。—「化學の書物を一時片着けて、私は目下、一般歴史及び地理學の知識を得ようと努力してゐます。最近、ギボンのローマ帝國衰亡史を讀みました。ギボンは、今では光彩陸離

たるヨーロッパ諸國を形成してをる野蠻諸民族の起源及び進歩について若干有益な消息を傳へ、かくも長きあひだ世界を壓服してゐたところの、人々の好奇心を觸發せざるを得ない彼の暗黑期の始まりに若干の光りを投げてゐます。私の考へではギボンは非常に面白い著作家です。彼れの文體は、歴史書としては一般に絢爛に過ぎると言ひ得るかもしれませぬが、時には眞實に崇高の感がしますし、到るところ興味ふかく且つ愉快です。私は續卷の出るのを非常に期待してゐます」と。ギボンのこの名著は第一卷を一七七六年に、第二卷及び第三卷を一七八一年に出したもので、マルサスは遲れながらもそれを入手して耽讀したのであらう。彼が「出るのを非常に期待して」ゐた續卷、即ち第四・第五・第六の三卷は續け樣にその年内に出たのである。マルサスは歡喜したに違ひない。何故か。私は信ずる、マルサスはこの尨大な歴史書から「一般歴史の若干の知識」を得たに止まらなかつた、彼は人間歴史の見方を、觀察の方法を、體得したのである。短的に言ふなら、マルサスは、「人口の增加」といふ根本事實に結びつけて人間歴史を解釋しようとする獨特の見地を發見しつゝあつた。ギボンの『衰亡史』(特に邦譯第二卷)はアジア及び北歐諸民族の大移動を生彩な筆致でもつて叙してゐるが、ひとはこゝに食糧と結びつけての過剩人口に動源を見ようとするマルサス的見地の閃きを見逃がすわけには行かないであらう。

學窓で得たマルサスの親しい友人としてはオッター(William Otter)及びクラーク(E. D. Clarke)の二人が知られてゐる。彼等は一七九九年マルサスの北歐旅行に同行した。オッターは僧正となり、後にマルサス家

と姻戚關係を結び、さらにマルサスの歿後には彼れの遺稿を整理し、また最初のマルサス傳記者となつた。クラークは旅行好きで、風變りで、「ケムブリッヂの變り者」（ケインズ）であつた。しかし專攻は鑛物學で、後には母校の生徒監となり（一八〇五年）、次いで初めての鑛物學教授となり（一八〇八年）、そして最後には大學司書官となつた（一八一七年）。尙、マルサスの北歐旅行にはクリップス（J. M. Cripps）といふ人物も參加してゐるが、これはクラークの門弟であつた。―さて、ギボンを讀みつゝあると父に告げた吾々の「數學優等生」マルサスは何處へ行かうとしてゐるのであらうか。

四　オールベリ時代

マルサス傳中この部分は比較的空隙が多い。さきの記述を想起すると、マルサスが「數學優等生」として大學の全課程を卒へたのは一七八八年（二十二歳）であり、「特待校友」の地位に就いたのはフレンドの放逐運動がその頂上に達してゐた一七九三年（二十七歳）であつた。そこに五箇年の歳月が經つてゐる。五年前に「一般歴史及び地理學」への傾到が傳へられてから吾々は沓としてマルサスの研究生活を知ることが出來ない。たゞこの間に知られてゐることは、ボナーによると「數學優等生の後間もなく」―ケインズはこれを一七八八年頃としてゐる―「僧位」をとつたこと、及び一七九一年に父の待望の「學位」M. A. をとつたことである。これは「特待校友」の二年前である。「特待校友」になつてからマルサスは、ケインズによると一八〇四年の彼れの

結婚までケムブリッヂに「不規則に住まつた」といふことであり、ボナーによると一七九六年父の居住してゐるサリー洲オールベリの牧師補に就任してからケムブリッヂでの「定住を止めた」といふことである。いづれにせよわが經濟學者マルサスは、すでに早くから僧侶たらんと志望してゐる！

この、吾々にとつては思ひがけない志望は、マルサスが大學に入る「ずつと以前から」(ボナー)有してゐたらしい。大學生活の中頃に彼はこの件について學長ビードン博士 (Dr. Beadon) に相談した。そしてその顚末を次の如く父に報じた。—「學長は最初、私の談話における缺點が教會で身を立てる一障碍となるだらうとの考へから、僧位をとることに寧ろ反對の勸告をなさるやうに見えました。そして學長は、幾許かの才幹を有する青年が、どんな職業にせよ少くともその首位に達するといふ若干の望みなしに就職するのは殘念なことだ、とのお考へでありました。けれども私がその後、學長に向つて、私の最も希望するところは田園における隱遁生活にあつた旨を語りましたときは、學長はそれなら私の談話は大した妨害となるものとは思へないと申され、學長御自身でも、私が禮拜堂で聖書を朗讀したり演說したりする際には殆んど一語をも聞き洩したことはないと仰有つてゐました。」(一七八六年四月十九日附・傍點現引用者)

マルサスが何故早くから僧位をとらんと決心してゐたかはこの手紙で明瞭である。彼は前述の如く一七九六年にはオールベリの牧師補に就任、そして—ケインズによれば—一八〇二年十一月二十六日にはリンクスのウエールスビー (Walesby, Lincs) の牧師職を受持つた。しかしながら、マルサスのこの僧職が自己目的でなか

つたことは注意しなければならぬ。彼は僧職に就きながら尙「特待校友」として「不規則的に」ケムブリッヂに出校居住し、彼れの時間をこの二つの間に分つてゐた。彼れの僧職の主目的は要するに「田園における隱遁生活」にあつた。讀者はすでにこのやうな生活態度が、「社交的ではあつたが時折りの孤獨を好む」父ダニエルの性格遺産に發してゐることを想起するであらう。否、想起はそれに止まらない筈である。彼は僧位に就いて「トーマス・ロバート・マルサス師」と呼ばれたが、同時に彼は「談話における缺點」を持つて生れてゐた—彼れから數へて五代目の祖先、すなはち彼の祖父のその又祖父たる、ノートホルトの「ロバート・マルサス師」がその名とともに缺點をもわがマルサスに讓り傳へたのである。（註記するがこの缺點は後に彼が學校教授となる場合に問題となつたと私は聞いてゐない。尙、マルサスの息子にはこの缺點はなかつた由である。）

ともあれ、マルサスが少くともその時間の半分を送たオールベリでの「隱遁生活」は、彼にとつて實り多きものであつた。父と住居を共にしたためもあらうがマルサス父子の學問的交渉は主としてこの時代に屬してゐる。父子は爐邊を圍んで社會、政治、經濟上の時事問題を論じ合つたに違ひない。その最初の產物は不刊行に終つた論稿『危機。—イギリスの興味ある現狀についての一觀察』（一七九六年）* であつた。私は無論この不刊行の論稿を見てゐやう筈はないけれども、オッターやスチブンによるとこの論稿は貧民問題に着眼し自由黨的立場から當時のピット政府の政策を批判彈劾したものである。しかし救貧法案を支持してゐる所から察してこれはマルサスが當時まだ「人口理論」を考へてゐなかつた證左であるとされてゐる。しかし興味ふかきこ

とはこの論稿の中にすでに「人口問題」にふれた一章句が含まれてゐることである。ボナー（マルサス初版複刻版註解・一九二六年）及びケインズ（前出評傳集・一九三三年）が掲げてをるのを見ると、それはかう書かれてゐる。—「人口問題については私はペーリー副僧正に同意することが出來ない。彼は何處の國においても幸福の量は最もよく人口數によつて測定されると言ふのである。增加する人口は一國の幸福と繁榮とのおそらく最も確實な標識である。しかし現實の人口はたゞ過去せる幸福の一標識たるに過ぎないであらう。」

ボナーはこれに附言していふ、「父はその子が、一七九六年に書いてデブレットに提出して拒絕されたピット政府の評論『危機』を、よく出來たと思つてゐた」と。少くとも人口問題の記述に關する限り、私はこゝにすでに、後年展開せらるゝマルサス思想の性格が簡明な形でよく表はされてゐると思ふ。彼はケムブリッヂ在學中おそらく幾度びか—試驗のためにも—ペーリーの著作を讀みながら、しかもいつの間にか、人口は幸福の原因なりや結果なりやといふ根本問題につき彼れの終生を支配する思想方向を固めつゝあつたのである。

＊『危機』の執筆年代及び不刊行の事情については若干の異說がある。最も古いところでは、まづオッターは最初のマルサス傳（一八三六年・マルサス經濟學原理第二版卷頭所載）において、この論文が「一七九七年頃に書かれた」と傳へてゐる。しかしオッターのマルサス傳が公表された翌一八三七年一月の『エヂンバラ評論』誌上に掲げられたエムプスンのマルサス評傳には「一七九六年」の執筆としてある。これはエムプスンの方が正しいやうで、近年の傳記者、特にスチブン、ボナー、ケインズ等はすべて後者の說を採つてゐる。不刊行に終つた事情についてはスチブンが、「父の要求で出版を見合はした」と記してをるのが異色である（スチブン編、國民傳記辭典第十二卷、マルサスの項を見よ）。しかしこれは「父の要求」ではな

く、本文中に記した如く父は寧ろ出版のために書店デブレット（Debrett）に奔走したが奏効せず遂に不刊行に終つたといふのが眞實である。この事情は父ダニエルが滯在先のバースからオールベリのわが子に宛てゝ書き送つた一通の手紙（一七九六年四月十四日附・ボナーの『マルサスと彼れの業績』中に收む）によつて判然するところである。尙、マルサスが彼れの人口論文だけではなくこの最初の論文をも匿名で出さうとしてゐた形跡が見られるのは面白い。エムプスンの記述に基づいて本文中に掲げた『危機』の副題のあとには『―憲政の一友によつて。』と認められてある。

『危機』執筆の後マルサスの研究は愈々多忙となり、父との談論も一層活潑となつた。フランス革命の齎らしたイギリス社會の旋風は次章で取扱ふとして、フランスでは一七九五年にコンドルセーの獄中遺稿『人間精神の進歩』が公刊せられるし、イギリスでは一七九三年に初版を出したゴッドウィンの『政治的正義』（全二卷）が『危機』と同年の一七九六年に改訂第二版を出して謂ゆる洛陽の紙價を高からしめるの反響を示してをり、翌一七九七年には更に彼れの論文集『研究者』が出版せられた。マルサス父子が今やこれらの思想問題の新著―最初はゴッドウィンの『研究者』中の一文『貪欲と濫費』―を材料にして、父がそれを辯護し子がそれを反駁するといふ形をもつて熱心な討論を進めたこと、そして結局その子が「自分の思想を、會話でするよりもより明瞭に行ひ得るだらうとの考へから、ほんの紙上に述べてみるつもりで、座に着いた」といふことから出來上つたのが彼れの『人口原理論』（初版一七九八年・序文六月七日）に他ならぬことは、周知のところである。時にマルサス三十二歳、その父六十八歳。―「また悪いお天氣だね、乘馬するにも散歩するにも。少し内にゐて、ゴッドウィンの研究者についてのお前の意見を聞かしては呉れまいか。ゴッドウィンに萬事贊成し得ると

いふ人はゐないだらうが、しかしわたしのやうな古い改革者は大體はそれに贊成出來る。お前だつて彼れの僧侶論を讀んだら心服し得るだらうが、わたしは多分それ以上にだね。」―これはマルサス研究者ボナーが一九三四年十二月のマルサス歿後百年を記念して『エコノミック・ジャーナル』に寄稿した『マルサス父子の對話』の始まりである。

これからは、吾々はこの『人口原理論』と倶にある。それは彼れのオールベリ時代の―或はひと若し望むならば、「僧侶」時代と言ひかへてもよいが―最良の產物であつたばかりでなく、實に彼れの生涯を通じての最大の業績の母體となつたものである。この書が與へた反響その他はすべて後に讓らう。ただこゝでオールベリ時代に因みて言ひ添へて置きたいことは彼れの職業と人口問題研究との繫がりである。「僧侶マルサス」は多くの論敵によつて彼れを罵倒する好名稱の如くに用ひられて來たので、ひと或はどうして「僧侶」と「人口問題」とが結びつくかと疑ふかも知れない。事實、一九三四年のマルサス歿後百年記念の當時、私を訪ふた新聞記者がいとも興味ふかき面持ちで、しかも最も執拗に尋ねた問題は正にそれであつた。上來の記述で問題の一半はすでに明かになつてゐる筈である。それは「僧侶」と言つてもマルサスは專門の僧侶ではなく目的は「時々の孤獨」を愛しての「田園における隱遁生活」にあり、しかも彼は尙「特待校友」としてケムブリッヂ大學に擊がりつゞけてゐたといふ事實である。問題の他の半分はしかし一層深刻に考へられねばならぬ。といふのは古來人口問題を取扱つた論者で「僧侶」に屬する人は實際に多いからである。古いところでは先づイタリア

のボテロがさうであり、次いではプロイセンのズュースミルヒがさうであり、またマルサスの直前の人としてはフランス人ブリュックナーがさうであり、イギリスでは既述のペーリーは別としてもウォレース及びタウンセンドがさうであつた。さうしてこれ等の人々は何れも人口論の發達に多かれ少なかれ寄與するのである。かく見るならば吾々の最初の問題はこの事實だけで再び紛糾し始めるであらう。だが私は簡單にかう答へる、―人口問題は社會問題と結びついてゐる。社會問題は當初は貧民問題として現はれた、而して社會のこの現實問題に最も直接的にぶつかるのは當時の「僧侶」であつた。彼等が眞實に熱烈なる人類愛と社會を洞察する鋭敏なる觀察力とを持つてをればをる程「人口問題」は彼等の眼前にあつた。かくて專門的「僧侶」にあらざりしわがマルサスも亦人類への愛と活眼とのために本問題の重要さに想到したものであると。附言するまでもないが彼れの處女論文『危機』はすでに貧民問題を主題としたものであつた。ただ彼はその際、この貧民問題と人口問題とを理論的に結びつけるといふ境地には達してゐなかつたのである。

五　ヘイリベリ時代

實り多かりし前項のオールベリ時代は、實際はまだ暫らく續くのである。―匿名の初版『人口原理論』を發表して一擧に一流の經濟學的著作家の列に加はつたマルサスは、次章（略）で詳しく述べる如き事情で間もなく增訂を思ひ立つたが、そのためには豐富なる他國の資料を蒐集する必要もあつて翌一七九九年ケムブリッヂ

時代の學友達と共に北歐旅行を試みた。同行者がオッター、クラーク、及びクリップスの三人であつたことは前に述べたが、彼等はまづ、ハムブルクに至り、北上してスウェーデンに入り、六月末にそこのウェナー湖畔のハルビー（Halby）で分れた。マルサスとオッターとはノルウェーへ、クラークとクリップスとはボスニア灣北端のトルネオ（Torneå）へと。ケインズは言ふ、「マルサスとオッターとは、多分、生來の旅行家であり蒐集家であるクラークの凄じき且つ並外れの精力によつて疲れ果てゝ、旅行の一部分を遂げたにすぎなかつた」。しかしマルサスは—スチブンによれば—スウェーデンを通つてノルウェーに出で、フィンランド及びロシアをも視察した上、同年十一月の始めに歸國した。クラークとクリップスとは尙ほ兩三年この旅行を續けた。

歸國したマルサスを最初待ち受けたものは彼れの一家の最大の不幸であつた。すなはち彼れの幼少時の「師」であり長じては彼れの最良の「友」であつた父ダニエルは翌一八〇〇年一月に歿し溫雅と仁愛の心の授贈者であつた母ヘンリエッタ・カザリンも亦亡夫のあとを追ふが如く三箇月の後に忽然として他界するのである。しかし吾々は安心してよい、この打續いての不幸に出會つたわがマルサスは、少くとも同年の秋頃には充分にそれを償ひうる幸福を見出してゐたからである。彼はこの年『危機』から數へて第三の論文を書く。『食量騰貴論』—詳しくは『現下の食糧高價の原因についての一研究』—がそれで、分量から言へば『人口原理論』とは比較にならない薄い冊子であるが、こゝには後にリカアドとの論爭において展開せる實際經濟問題に對するマルサ

スの態度が或る程度表明せられてゐる。後代に至つてこの論著の意義を初めて高く評價したのはケインズである。「言葉と思想とは簡單であるが、そこには體系的經濟思想の創始がある、」「この著はマルサスが書いたものゝ中、最上の一つである」とケインズは激稱してゐる。しかしこの著の構想が「町への馬上で」獲られたといふマルサスの述懐ほど吾々のマルサス傳にとつて興味ふかき事實はない。彼はこの間の消息をターナー(Rev. George Turner)宛ての、一八〇〇年十一月二十八日附の手紙の中で自から傳へてゐる。議會の開會—ボーナーによれば十一月十一日—前に發表したいとの考へもあつたが、彼はその手紙の中でバースへの旅行を控へて一日二日で完成すべく「出發の前夜二時までかゝつて脱稿」したと書いてゐる。彼は矢張り、後代の口汚い批評家たちが罵るやうに「僧侶流に讀み違へた剽竊」(カール・マルクス)を事とする肌の著作家ではなかつたのである。が「バースへ」と吾々のマルサスは急いでゐる。彼はこゝでも卒直であつた。一八九七年『イコノミック・ジャーナル』誌上でフォックスウェルによつて初めて發表せられた右のターナー宛手紙にはかう書いてある—「貴下のお手紙はバースへ轉送されて來ました。私はこゝへ美しい從姉妹の一家を訪門に來てゐたのですが、そんなわけでお返事を書いてゐるだけの暇も見付け得なかつたのです。」—マルサスは幸福であつた(三十四歳)。この幸福がどうなるかは讀者は尙暫し待たれねばならない。

越えて一八〇二年(三十六歳)の春、アミアンの和議によつてナポレオン戰爭の風塵が治まるやマルサスはこの「短き平和の期間」を利用して、再び大陸視察の旅に出でた。しかし今度はフランス及びスウィスへ。

求め得た資料は豐富であつた。かくて翌一八〇三年（三十七歳）六月、彼れ自から「新著と見做しうる」と述べたところの尨大なる四折り判六百十頁の『人口原理論』第二版が出でたのである。彼は三回の著作機會においてすべて氏名を匿してゐた—ボナーは言ふ、この「匿名のヴェールは、左程厚くなかつた」—が、今やこの『人口原理論』第二版に至つて初めて彼れの正名が錄される。曰く「ケムブリッヂ、ジーサス大學の特待校友、學士、T・R・マルサス著」と。副題も亦書き改められた。即ち初版『—この原理が社會將來の改善に及ぼす影響、並びにゴッドウィン氏・コンドルセー氏・その他諸著作家の思辯についての評論。』より第二版『—この原理が人類の幸福に及ぼしたる過去及び現在の影響についての一觀察、並びにこの原理がひき起す諸惡の將來における除去又は緩和に關する吾々の豫想についての一研究。』へ。マルサスはこれによつて社會思想の評論的著作家たることを止めて「人口」それ自體を追求するところの科學的著作家となり、廣き意義における經濟學上の彼れの地位を確立したのである。

その翌年（一八〇四年）マルサスは、翌年ハートフォード（Hertford）に新設され後間もなくヘイリベリ（Haileybury）に移轉する東印度學校の教授職就任の內交渉を受けた。彼は無論、喜んで受諾したに違ひない。といふのは、彼は一七九六年以來オールベリでの「牧師補」、後ち一八〇二年（第二回大陸旅行の年の暮）にはウェールスビーでの「牧師」を擔當してゐたとはいへ、それは本來の意味での彼れの職業ではなかつたからである。彼には定職がなかつた、これ彼をしてかくも短期間內に大小幾つもの著作をなさしめた眞實の理由であ

る。從つて若し必要があるなら教授職以前の彼れの職業は「著述業」であつたと言つた方がよいかも知れない。（附言するがボナーによると、マルサスは一八二〇年ガロイス（Gallois）に、その時までに彼れの全著作は總額一千磅以上は齎らしてゐないと述べた由である。）かくて彼は一八〇五年（三十九歳）―スチブンによると「この年の暮」―東印度學校に就任した。最初提案された職名は「一般歴史、政治學、商業、及び財政學の教授」といふのであつたが、實際に就任したのは「近代史及び政治經濟學の教授職」であつた。これ蓋しイギリスにおける最初の經濟學教授職であつた。―「ヘィリベリ時代」と私の名付けるマルサス傳の部分は漸くこゝから始まるわけである。

しかし私はこゝで彼れの「幸福」の結末を簡單に報告して置かねばならない。一八〇四年（三十八歳）―スチブンやボナーによると「三月十三日」、しかし伊藤久秋氏の考證によると正しくは「四月十二日」―マルサスは結婚した。これは『人口原理論』第二版刊行の翌年であり、同時に東印度學校就任の前年に當つてゐるが、この時にはすでに新地位への見込みが立つてゐた。「この地位を見て」マルサスは結婚したとボナーは記してゐる。それは恰かも、「一家を支へうる見込みなしにする結婚」を道德的な惡と考へた彼れの持說を身を以て實踐した如くに見える。しかし、自からマルサスの著作を讀むことなく、次々に人手に渡る「磨滅した通貨」の如き形で「マルサス說」を承知し、人口增加と結婚とに無條件に反對するものだと思ひ込んでゐた當時の多くの人々には、マルサスの結婚の噂は全く意外であつたらしい。時間はすべてを自然の軌道で解決する。マル

サスは人口の敵でも、結婚の敵でもなかつた。否彼は反對に、結婚にみちびく自然の變愛をさへ讃へる人であつた。こゝろ靜かにひとは『人口原理論』初版を繙いてみらるゝがよい。マルサスはすでにそこで判然と「有德な戀愛のまことの悅びの經驗」を「全生涯における照りかゞやく場所」として讃へてゐるのである。—私は早く書き添へなければならない。マルサス夫人の名は亡母の名に通じてハリエット（Harriet 1777—1864）、かのバース附近のクラヴァートンのジョン・エッカーソール（John Eckersall）の息女であつた。年齡二十八歲。讀者はこゝで四年前、『食糧騰貴論』を夜の二時までかゝつて書きあげて「バースへ」と急いだマルサスの「美しい從姉妹の一家の訪問」を想起せらるゝであらう。夫人は正にその中の一人であつた。だがこのバース附近の「クラヴァートン」がマルサスにとつては更に懷かしい古い思出の地であつたことを記憶に留めてゐる讀者があるであらうか、今はすでに二十五年前マルサス十三歲のとき兄シドナムに伴はれて初めて師事したリチャード・グレーヴスの私塾の地を。そしてこの地は又、マルサスの永眠の地ともなるのである。

さてヘイリベリでの教授生活はどうであつたか。勤先の東印度學校（East India College）といふのは東印度會社の職員を養成する目的で設立されたもので修業年限約二箇年、課程はオックスフォード及びケムブリッヂに準じた。マルサスが後年同校を擁護して起稿發表した『東印度學校に關する聲明書』（一八一七年）の中で彼れ自から述べてをる所によると、入學には前學校長の證明書を提出せしめ、學長及び教授の前でギリシャ語、ラテン語及び數學の試驗を課して學力不足者の入學を防いだ。入學年齡は大體十六、七歲であつたが中に

は十八、九歳の者もあり十五、六歳の者もあつて甚だ區々であつた。學科の主なるものは古文學、東洋語、數學、自然哲學、英國法典、それからマルサスの擔當する「近代史及び經濟學」等で、これらの講義はすべて學生が前から準備しておく必要があるやうな仕方で行はれた。學期は一年を二期（各五箇月）に分ち各期末に二週間にわたる試驗を課し、優等生には賞を與へた。又學生は校内で寢室兼居間として銘々一室を當てがはれ、そこで朝の食事をし、お茶を呑み、そして授業の準備をした。自分で自分の事を決し處理すること、つまり自治の習慣と個人責任の觀念とを培養することが教育の根本方針とせられ、これを犯すものは嚴重に罰せられた。（註記するがボナーは、この方針こそマルサスの思想にうまく一致してゐたと述べてゐる。）學生の數は少數であつたが、マルサス自身は寧ろ少きを可とし彼れの講座では「一クラス十二人乃至十四人以上を減多に持たうとしなかつた」（ボナー）由である。

＊ボナーによると、この學校は一八五八年における東印度會社の死まで名目上は死ななかつた。一八五五年に會社は閉鎖を決し、いま在學してゐる學生が課程を終へるまで續けることにした。

ひとり近代人口理論の開拓者であるばかりでなくイギリス正統派經濟學の三大建設者の一人と目せらるゝわがマルサスが一見この孤影悄然たるヘイリベリの教授職に甘んじ終生敢へて他を顧みなかつたといふことは全く不思議な感がする。傳記者達は筆を揃へて、「彼はこの職に後半生を捧げた、故障はあつた、しかし全體として後半生は快適なものであつた」（ボナー）、「彼はヘイリベリを滿足すべき學校と思ひ、また經濟學は、了

解し得たばかりでなく、愚鈍にはそれを考へさへしなかつた青年達に、適當した研究だと考へてゐた」（スチブン、ケインズ）等々と記してゐる。マルサスがこの期間に行つた講義の一斑を窺はしめるものとしては、インヴェラリティ（Inverarity）といふ當時の學生が筆寫した一八三〇年度のアダム・スミスについての講義が、アルフレッド・マーシァルの所有として傳へられてゐる。これによると當時の學生はマルサスを"Pop"と愛稱してゐた、しかし他の點では彼に充分の敬意を表してゐた（ボナー）。學校の禮拜堂は一八一五年八月からひらかれ、それ以後教授の約半數は勤行に出た。マルサスはその中にあつた。こゝでケインズは「マルサスは說教もした」と記してゐるが、ボナーは「吾々は彼れの說教については何も有しない」と述べてゐる。―以上が東印度學校におけるマルサスの教授生活について吾々の知りうる主要事の殆んどすべてである。前半生の記錄に比べて聞知しうる所は餘りに少い。しかし要するに、マルサスがこゝでの生活を「滿足」に思ひ彼れの死に至るまでの二十九箇年間を捧げたといふことは、一には彼れの母讓りの忠實、溫雅、謙遜の資質にも因るであらうが、彼れの心には敢へて世俗を顧みない確信に滿ちた廣々とした世界がひらけてゐたのである。研究及び著作を通じての眞理の世界―その開拓こそ彼れの全精力を傾到しての仕事であつた。

マルサスはまづ一方、『人口原理論』の引續いての加工改善と陸續現はれ來たる批評者達の主要なるものへの應酬とで多忙であつた。『人口原理論』は一八〇六年に第三版（全二卷）、一八〇七年に第四版（全二卷）、一八一七年に第五版（全三卷）、そしてさらに一八二六年に第六版（全二卷）を出した。この第六版が彼れの

存命中の最終版であるが、これを二十八年前の初版に比べると内容字數において優に五倍の大著となつたのである。他方ではマルサスは經濟學上の多數の論著を述作したが、その主要なものは『穀物條例の影響についての考察』(一八一四年)、『外國穀物の輸入制限政策についての一見解の基礎』(一八一五年)、『地代の性質及び進歩についての一研究』(一八一五年)、『經濟學原理』(一八二〇年)、『價値の尺度の叙述と解明』(一八二三年)、『經濟學の諸定義』(一八二七年)等がある。就中『經濟學原理』はこの部面での彼れの代表作で、リカアドの主著『經濟學及び課税の原理』(初版一八一七年)に對する批判を骨子としてゐる。マルサスは又、一八二四年『大英百科辭典』補遺編に長論文『人口』を寄稿し、後にはこの要旨を『人口原理の概觀』(一八三〇年)として纏めた。救貧法に關しては『サミュエル・ホイットブレッド代議士への手紙』(一八〇七年)、また東印度學校に關しては前述の『聲明書』(一八一七年)の他に『グレンヴィル卿への手紙』(一八一三年)を公刊した。以てマルサスの、ヘイリベリ時代における多方面の活動を推知し得るであらう。(後略)

主要參考文獻

Bonar, J., Parson Malthus. Glasgow 1881.

———, Malthus and His Work (1st 1885). 2nd ed. London 1924. 邦譯あり: 堀經夫・吉田秀夫兩氏 昭和五年 改造社。

———, Art. "Malthus" in: Palgraves Dictionary of Political Economy, Vol. II. New. ed. 1923.

———, Notes on Malthus's First Essay on Population, reprinted by himself. London 1926.

———, The Malthusiad: Fantasia Economica. In: Economic Essays contributed in honor of J. B. Clark, ed. by Hollander. N. Y. 1927.

———, The Centenary of Malthus: A dialogue (Daniel and Robert Malthus). In: Economic Journal, Dec. 1934.

Comte, C., Notice sur la vie et les travaux de T. R. Malthus (1836). Dans: Essai sur le Principe de Population, trad. par J. Garnier. 2me éd. Paris 1852.

Drysdale, C. R., The Population Question according to T. R. Malthus and J. S. Mill, giving the Malthusian theory of over-population. London 1880.

———, The Life and Writings of Thomas R. Malthus. 2nd ed. London 1892.

Dühring, E., Kritische Geschichte der Nationalökonomie. 3. Aufl. Leipzig 1879.

Empson, W., Life, Writings, and Character of Mr. Malthus. In: Edinburgh Review, January 1837.

Gibbon, E., ローマ衰亡史（特に第二卷） 野々村戒三譯 春秋社版 世界大思想全集の中 昭和5年。

Kent, C. B. R., The English Radicals. An historical sketch. London 1899.

Keynes, J. M., Essays in Biography. London 1933. (Therein: Robert Malthus, the First of the Cambridge Economists, pp. 95–149.

Malthus, T. R., Statements respecting the East-India College. London 1817.

Otter, W., Memoir of Robert Malthus. In: Malthus's Principles of Political Economy. 2nd posthumous ed. London 1836.

Paley, W., The Principles of moral and political Philosophy. 2 Vols. Dublin 1785.

Payne, J. O., Collections for a History of the Family of Malthus. Privately printed. London 1890.

Ricardo's Letters to Malthus (1810–1823), ed. by J. Bonar. Oxford 1887. 邦譯出版進行中：中野正氏 岩波文庫。

Rousseau, J. J., エミール　平林初之輔氏譯　岩波文庫。

Stephen, L., The English Utilitarians. 3 Vols. London 1912. (Esp. Vol. II, pp. 137–185).

———, Art. "Malthus", in: Dictionary of National Biography. London 1921–1922. (Vol. XII).

伊藤久秋著　マルサス人口論の研究　昭和3年　丸善刊。

内田銀藏稿　まるさす先生略傳『經濟論叢』大正5年5月　まるさす生誕百五十年記念號所載。